OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『狭衣物語』構造論 : 巻一の飛鳥井女君物語について
Author(s)	片岡, 利博
Citation	語文. 1985, 45, p. 12-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68729
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『狭衣物語』構造論

――巻一の飛鳥井女君物語について――

片岡利博

本稿は、『狭衣物語』を構成する叙述のうち、巻一の飛鳥井女君の物語の部分について、その叙述の構造を考えてみようとするものである。同様の試みを巻三の一品宮の物語についておこなったのは、もう随分以前のことである[注1]。それ以後、私の『狭衣物語』に対する理解は何程深くなったわけでもない。むしろ、構造論という考え方が妥当であるか否かを、あれ以後、少しは深く考えてみた。その結果、前稿でとった方法は本稿でもほぼそのまま踏襲することとなる。その意味でも前稿は是非参照して頂きたいのであるが、用語等についてはもう一度簡単に説明しておく。

〔構造〕というのは、構成といっても構想といってもかまわないのであるが、そうしなかったのは、本稿が物語の叙述のみを対象とするのであって、作者や成立事情などといった、いわば作品の外在的な問題を極力排除しようとしたためである。また、本稿は日本古典文学大系本[注2]をテキストとし、とくに問題にならない限り、他の本は扱わない。上述のテキストをどう読むか、ということが本稿の関心事であり、その読みの妥当性を物語本文の叙述の構造に求めようというのが本稿の方法だからである。前稿同様、〔筋〕という語も用いた。これはごく一般的な意味に取って頂いて差し支えないが、「因果関係によって連なる叙述の流れ」と定義されよう。

物語の叙述のなかから筋を抽出し、筋相互の関係を考えることによって、この物語の構造をみてみる。

1

飛鳥井女君は、巻一の半ばで仁和寺の威儀師某に拐されようとするのを狭衣に助けられるという形で登場する。飛鳥井女君の物語はここから始まると考えてよいが、先行する叙述の中にこれの伏線と見られる部分がないこともない。

飛鳥井女君は、従来繰り返し言われているように、中下層階級出身の気のおけない「らうたき」女として造型されている。そのことを念頭においてふりかえってみると、

(a) 数ならぬ人は、好き好きしくあるまじからんこと好まで、さり

ぬべからん蔭の小草の、露より外は知る人なからんこそよからめ。（六二―1）

と、狭衣が母堀川上にむかって話すくだりは、飛鳥井女君物語の伏線とみてよいであろう。この「蔭の小草」という語句は後にも飛鳥井女君を指して用いられている。（二八五―13）

さらに、これ以前、狭衣の人柄が紹介される部分で、

(b) 夢ばかりもあはれをかけ給はん蔭の小草などをも、思し心に思し放つべくもなかりけれど、いかなりけるかに、この世はかりそめに、「世皆不牢固」とのみ思さるるは、げに世の人の聞こえさせたるように、仏の現れさせ給へるにや。（三三―1）

とあるのもやはり飛鳥井女君物語の伏線とみてよいであろう。

さて、いま掲げた箇所(b)にも見えるように、当初狭衣は源氏宮以外の女性には殆ど関心がなかった。にもかかわらず、その後飛鳥井女君にのめり込んでいくようになるのは、源氏宮に恋心をほのめかして手痛く拒絶された一件（五四―8）と関係があろう。前掲(a)の「蔭の小草以外とは結婚しない」という発言がなされるのも、その一件の直後である。そして、一縷の望みを抱いて宣耀殿女御の許に出向いた狭衣は女御に逢うことも果たせないばかりか、かえって東宮から源氏宮への秘めた想いを指摘されて、心も「しどろもどろに」（六五―3）なって退出する。狭衣が飛鳥井女君に出会ったのは、まさにその帰途においてであった。飛鳥井女君に対する狭衣の態度を考える上で、このことは重要である。

2

飛鳥井女君物語の発端の威儀師事件は、狭衣と飛鳥井女君とを出会わせると同時に、女君を経済的に苦境に追い込むことになった。女君の乳母がこの「仁和寺の威儀師といふ者を語らひて、この君の事を扱はせ」（七二―6）ていたのであるが、その縁故がこの一件で切れてしまったからである。

乳母はこの苦境を打開すべく「陸奥の将軍」に従って東国下向を決意する。威儀師事件から東国下向に至るこの筋をかりに〈女君の不如意〉と名付けると、〈女君の不如意〉と並行して、一方では狭衣と飛鳥井女君の頻繁な逢瀬が語られる。こちらの筋をいま〈女君の恋〉と名付ける。

〈女君の不如意〉と〈女君の恋〉の両方の筋に関わる飛鳥井女君は、東国下向に乗り気になれるはずもなく、さりとて、まだこの時点では狭衣に身を委ねる気にもなれない。逢瀬が重なるにつれ、「見る程の心・物言ひなどは、むげに頼みかからぬにしもあらず、人ざまなど、待つ程さすがに過ぎぬ夜な夜なの数添ふままに、人知れずいみじう思」（七五―6）われはするものの、事情を打ち明けて頼る程には狭衣の愛を信じることもできないのである。

飛鳥井女君をして狭衣の懐に飛び込むことをためらわせているのは、狭衣の態度である。狭衣の飛鳥井女君に対する心情は、「かねていみじき心を尽くし給ふやんごとなき辺りども（源氏宮、一条院姫宮、宣耀殿女御等ヲ指ス）よりは、習はぬ草の枕を珍しと思して、その後は、宵・暁の露けさも知らず紛れ給ふ」（七二―1）とあり、また、「御心にも、このことの、人に勝れてめでたきなど、わざと思すべきにはあらねども」（七四―1）とあるのに明らかなように、

飛鳥井女君自身の美徳に、というよりは、その身分の低さからくる心安さにひかれていたのであった。だから、飛鳥井女君の許へ「待たるる夜な夜なもなく、紛れ歩き給ふ」(七四—3)一方で、ひとたび源氏宮を前にするや、全く当然のことのように、「飛鳥井の宿りは、戯れにもあさまし」(七六—10)と、飛鳥井女君との情交を否定的に考えてはばからないのである。

飛鳥井女君に対する狭衣のこうした心情は、女君に対して自分の素姓を明かさないという態度となって表れる。「かくおぼつかなき有様の頼み難さのつらきにや」(七五—10)と、女君の不安な胸中を十分に察していながら、「かく思ひかけぬ有様を暫し人にも知らせじ」(七五—11)と考えて、名乗らずに済ませるのである。狭衣が「暫し人にも知らせじ」と思う「人」は、ここでは特定の人とはなっていないが、後に「人知れず思ふ辺りの聞き給はんに、戯れにも心留むる人ありとは聞かれたてまつらじ」(九〇—16)とあるから、究極的には源氏宮への聞こえをはばかっているのだと考えるべきであろう。

こうした狭衣の心情や態度を、利己主義的だとか、体制順応的だとか、論評することは、本稿の目的ではない。むしろ、狭衣の態度はこの当時の上流貴族社会においてごく普通にみられるものであり、今述べたような批評はどちらかといえば、アナクロニズムに類するであろう。しかし、そのこととはまた別に、狭衣の態度が飛鳥井女君を苦境に追い込んでいるということは、物語が明確に語っているところであり、物語の叙述を素直にうけとる限り、これ以外の解釈はありえないであろう。作者の問題や当時の社会のありかたの問題などといった作品の外在的な問題と絡めて、いたずらに作品の叙述を曲解するようなことは避けたいと、私は思っている。

さて、逢瀬が重なるにつれ、飛鳥井女君は相手の男が狭衣であることに気づき始める。しかし、そのことは女君にとってなんら救いにはならない。狭衣のほうは「今おのづから我と知りなば、え厭はじ」(九一—3)と呑気に考えるが、女君はそうは考えないのであって、「我が身の程を思ふにも、猶頼むべき有様かは」(八〇—11)と、身分の余りの違いを痛感させられるだけであり、さらに、猶も「煩はしき人(正妻)の、さすがなる」(九一—7)がいる、などと出まかせの嘘を言って身分を隠し続けようとする狭衣をみると、女君の狭衣への不信感はつのらざるをえないのである。

3

東国への出発もさし迫った頃、女君は狭衣の子を身籠もり、〈女君の恋〉は新しい局面を形成する。また一方〈女君の不如意〉の筋も式部大輔道成の求婚という新しい事件の出来により新たな展開をみせる。乳母が道成の求婚を快諾し、東国下向の一件はたち消えとなるのである。道成の求婚は道成と乳母との間で秘密裡に処理され、女君には東国下向の中止だけが伝えられる。この時の女君の心理は次のように記されている。

(c) 女君は、まことと思ふに心地すこし落ち居ぬ。うちはへ悩ましくさへ思えけるも、「惜しからぬ身はいかにも疾くなりなばや」とのみ急がれつるを、かくなりにけりと聞きて後は、あはれなりける契りの程さへ思ひやられて、憂き身とのみ思ひ入りぬるを、すこしいたはしく思ゆる(九四—8)

ここで注意すべきは、これまで繰り返し語られてきた狭衣への不信がこの(c)には見られなくなっていることである。そして、これ以後、飛鳥井女君の心理描写のなかに狭衣への不信感を述べた箇所は見当たらなくなるのである。野分の夜、飛鳥井女君を訪れたときに狭衣の詠んだ歌、

逢ひ見ねば袖濡れまさる小夜衣一夜ばかりも隔てずもがな　（九五―4）

に対する飛鳥井女君の返歌は、諸本にずいぶん異同のあるところであるが、

いつまでか袖干しわびむ小夜衣隔て多かる中と見ゆるを　（第一系統本）

夜な夜なを隔て果てなば小夜衣身さへ浮きてや流れ果てなむ　（第二系統本）

隔つれば袖干しわぶる小夜衣つひには身さへ朽ちや果てなむ　（版本の類）

は、いずれをとってみても、狭衣に対して心を開きはじめた女君の心理がよく表れていると思う。(注4)

このように見てくると、東国下向の一件は、結果的には〈女君の恋〉と対立する筋を形成する事件ではなかったことになる。この事件を契機に飛鳥井女君のなかで狭衣への思慕の情が募ってくるわけであるから、これはむしろ〈女君の恋〉の筋を形成すべく機能したということになる。しかし、それはあくまでも結果からみた場合のことであって、先にも述べたように、本稿の目的は作者の意図や、いわゆる〔構想〕を論じるのではなく、作品の叙述がどのように展開しているのかを記述することにある。

以上見てきたところをここで整理しておくと、次のようになる。

威儀師事件―→〈女君の不如意〉―東国下向―→道成の求婚―→
　　→〈女君の恋〉―女君懐姙―→狭衣への思慕―→

4

前節に図示したように、道成の求婚以後、〈女君の不如意〉と〈女君の恋〉の二つの筋が並行して語られてゆく。それまでは、飛鳥井女君は両方の筋に関わっていたが、ここからは両方の筋に関わる人物というのはいなくなり、〈女君の不如意〉のほうは道成と乳母、〈女君の恋〉のほうは狭衣と飛鳥井女君というふうに、二つの筋が接点をもたずに展開していく。これは、先にも述べたように、乳母が道成の求婚を女君に告げずに秘密裡に処理しようとしたからである。

ところで、従来、飛鳥井女君の物語には『古本住吉物語』など、継子いじめの物語からの影響があると言われてきた。(注3) しかし、私はこの説には同意しかねる。それは、本稿が所謂〔構想論〕の立場をとらないから、というのではなく、この説には作品の解釈の上で大きな誤りがあると思うからである。

件の説は、飛鳥井女君の物語中にただ一ヶ所だけ現れる「主計頭」(七二―5)なる語を『古本住吉物語』と関係づけることから始まったようであるが、むしろ、この説を根底で支えているのは、女君の乳母が女君を苛めたり、食いものにしたりしている、とする解釈である。

しかし、この乳母は女君を苛めようとしているのであろうか。しばらく、物語の叙述に基づいて乳母の行動を追ってみる。

女君の両親が亡くなったあと、女君には度々出仕の誘いがあった

が、この乳母は「心賢う、物したたかなる様にしなさんとて、参らせ」(二四〇―5)なかった。乳母の夫が主計頭であり、「なま便りある」(七二―5)状態だったからである。ちなみに、この「便り」を、『大系』の頭注では縁故の意としているが、そうではなく、これは、貯蓄の意である。前掲の説では、「主計頭」のコノテイションを古本住吉物語の悪役とするのであるが、私はむしろ、この「なま便りある」ということを主計頭のコノテイションと考えるべきだと思う。

さて、夫主計頭の死後、乳母は威儀師と関係をもち、経済的援助を得、女君の世話をさせる。しかし、乳母が女君を威儀師に与えようとしたのでないことは、威儀師事件の後、乳母自身が「浅ましく、かかる心のありける」(七二―11)と驚いていることからも明らかである。乳母を継母に、威儀師を『落窪物語』の典薬助に比し、乳母が威儀師に女君を襲わせたかのように解くなど、到底受け入れられる説ではない。

東国下向については、これが女君にとって辛いことであったのは確かである。そして、女君のそうした心情に対する細かい配慮が乳母に欠けていたとはいえよう。しかし、それは、乳母が女君を苛めようとしたということにはならない。威儀師事件後、現実に経済的に逼迫した状況の下で、なんとか女君の生きてゆく術を画策するのは、ある意味では乳母たる者の使命である。乳母はこの時、是が非でも女君を東国下向させようとしたわけではなかった。源氏宮の東宮入内に女房として出仕するよう勧めてもいる。それを拒んで東国下向を選んだのは女君自身である。

道成との縁談を秘密裡に運んだことについては、次節に詳述するが、それも悪意からでたものでないことは明らかである。狭衣が名乗ることさえせずに足繁く女君の許に通い続けており、その狭衣を「別当の少将」だと思いこんでいた乳母としては、事を秘密裡に運んだのもやむをえないやり方であったというべきであろう。非をいうならば、素姓を隠し続けた狭衣にも非はあると言わねばならない。

以上見てきたように、乳母は終始一貫して、生活者として事態に現実的に対処しているのであり、そのことが女君をますます窮地に追い込んでいくことになるわけで、継母の悪意が姫君を窮地に追い込んでいくという構造をもつ継子いじめ物語とは、その点で大きな違いがある。そして、この違いをわきまえておかなければ、飛鳥井女君の物語の誤読は免れないと思われるのである。

5

前節で述べた乳母の態度は、道成の求婚から筑紫下向に到る展開においても基本的には変わっていない。東国下向の中止以来、女君の心は急速に狭衣に傾いており、

行方なく身こそなりゆけこの世をば跡なき水のそこを尋ねよ
(九六―5)

渡らなむ水増さりなば飛鳥川明日は淵瀬になりもこそすれ
(九七―1)

の歌に見られるように殆ど狭衣と心情的に一つになった感がある。このような状況下で、女君を道成と結婚させるには、事を秘密裡に運ぶのも止むを得ないことであったというべきであろう。

乳母は、西隣の家で井戸を掘るから土忌みをしようと言って、女

君を誘い出す。その言葉のなかで、「いみじきことを思へど、やもめにては思ふことの適はぬがわびしきぞや」（九七―10）と言っているのは、乳母の本心であろう。渋る女君に乳母は理を解く。女君が懐妊しているというのに、男は一向に誠実な態度を見せないではないか。別当の少将程度の君だちは、女の親があれこれ身の周りの世話をしてくれるのを目当てに通ってくるのであって、それをしてくれないと分かると、すぐに去っていくものだ。もし本当にあなたを愛しているなら、所違えの出先へも訪ねて来てくれるはずだ、と。

ここに語られる乳母の現実認識こそこれまでの乳母の行動を支えてきた論理だといってよい。そして、この論理の前に、女君も乳母の意見に従わざるを得ないのである。

威儀師事件以来、ずっと並行して語られてきた〈女君の不如意〉と〈女君の恋〉の二つの筋はここで統合され、一旦は乳母の側の論理で物語が展開することになる。しかし、当の道成が女君の許に夜な夜な通ってくる男の家人であるという事実を踏まえていない乳母の行動は破綻をきたさずに済むはずがない。

筑紫下向の船の上で、道成は女君に言う。

(d)　あな、をこがましや。某の少将の蔭妻にて、道行く人ごとに心を尽くし、胸を潰し給ふ心もやは。賤しうとも、またなく思ひかしづき聞こえんを取りどころに思せかし。なま君だちは、なづましくすずろはしきものぞ。我が殿のおはしまさん世には、某らに、よも、その君だち勝らじ。（一〇三―14）

道成は女君に対してこよなく誠実であり、言っていることにも全く嘘はない。そして、道成も自負するとおり、別当の少将よりははるかに将来性もあり、「江口わたりの逍遥」（一〇三―3）も取り止めて女君の機嫌とりに躍起になる実直な男である。しかし、狭衣を別当の少将だと勘違いしていることが、ここでは(d)の発言を滑稽なものにしてしまっている。同じ理を説いていながら、もはやここからは、先の乳母の発言のような、理路整然、といった感は感じられない。

滑稽さは、女君の機嫌を取ろうとして道成が、狭衣から贈られた扇を取り出し、「これを見給はば、まろが憎さも慰みなん。」（一〇六―4）とふざけかかり、「我が君（狭衣）をこそ命に換へても恋ひ愛しまめ。その青びれ男によりて、命も絶えぬべく見え給ふこそ、却りては心づきなけれ。」（一〇六―6）と言うに到って、極まる。女君の相手が狭衣だということを踏まえていないために、先の乳母の論理は、ここに到って全く無意味で滑稽なものになってしまっているのである。

道成が差し出した狭衣の扇には、狭衣の手で「渡る舟人かぢを絶え」の歌が書き付けてあり、女君の悲哀もまた、ここに極まりを見せる。そして、

かぢを絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む舟人
（一〇七―2）

から、

速き瀬の底の水屑となりにきと扇の風よ吹きも伝へよ
（一一五―1）

に至る六首の歌は、女君の悲劇性を漸層的にもりあげ、入水のクライマックスへと導いていく。

6

先にも述べたように、女君の愛人が狭衣であるという事実を踏まえていない乳母の側の論理が破綻をきたすのは、当然であった。それが女君の入水という形となって表れたわけであるが、では、入水に到るまでの女君の側の論理とはいったいどういうものであったろうか。

女君は乳母が相手の男を狭衣だとは考えていないことを承知していた。にもかかわらず、乳母の論理の前に屈伏したのは、「とやかくやとこの人(乳母)に言はんも、善きことと言ふべくもな」(八九—8)いだろうと考えたからである。そして、「いかなる僻事をし出でんずらん」(八九—9)と、乳母の論理が破綻をきたすであろうことまで予測しながら、あえて、乳母の言いなりになったのである。このとき既に女君は、「恐ろしきこと(出産)のあるついでにも、亡せなばや。世にあらずなりなんのみこそ、人をも身をも恨み果てで、やまめ」(九九—3)と、死を望んでいる。ただし、東国下向のときとは違って、女君は狭衣の愛を疑ってはいない。東国下向のときは「かやうに思し捨て給はざらんほどに、雁の羽風に迷ひなんこそよからめ」(八〇—11)と考えた。しかし、今回はそうではない。「むげに行方なくは、昔物語のやうに殊更びてや思さん。『かく』とばかりも聞こえさせたてまつらばや」(一〇〇—13)と、狭衣の愛を信じて疑わない。それは、「この世の外になりぬとも、忘るべき心地もせぬ」(一〇〇—16)という、狭衣への深い思いの表れである。

その思いがすでに乳母の論理をはるかに超えていることはいうまでもない。女君は現世的な意味で狭衣に頼ることを、もはや考えてはいない。それは狭衣の素姓を知ったときに、既に不可能だと承知していたことである。今の女君にとって狭衣は、自発的に愛をささげるべき対象であったといってよい。この思いから入水という行動への距離はわずかである。

道成があれこれと言い寄って来るのをよそに、女君は「神・仏、かかる目見せ給はで、とく失ひ給へ」(一〇六—10)と、死を願う。そして、次の(e)に見えるように、狭衣への思いがそれにさらに拍車をかける。

(e) もし、命、心にかなはで、ながらへば、行末に聞き合はせ給ひて、『さてこそありけれ』と聞かれたてまつらんも、今少し心憂かりなんかし。などてさし離れたる賤の男にてだにあらで、親しくよろづ聞き合はせ給ふべきことにてしもやありけん。遠きほどまで行き着きて、この有様(出産)を見扱はれぬ前に、ただいかにしても死ぬるわざもがな(一〇七—10)

かつて、石川徹氏は女君の入水を評して、「彼女がかつての帥の中納言の遺女として、毅然としてたかが亡父から見ればその部下に過ぎない太宰大弐の息子であり、且つ愛する男の家来でもある式部大輔道成の手を拒んで入水するのであつて、そこに階級の差がこの投身自殺の一つの条件となつてをり、受領階級・武士階級の興起といふ新しい事態に対する旧秩序側の抵抗が加はつてゐる」[注5]と説かれた。しかし、物語の叙述を素直に読み解くかぎり、そういう解釈は出てこないのであって、それはこの作品の成立の歴史的背景という外在的な問題を安易に作品の解釈に絡めた結果の誤読というべきであろ

う。女君が道成を拒んだのは、狭衣への愛を貫くためであり、(e)にもあるように、道成が「さし離れたる賤の男にてだにあらで」狭衣にきわめて近いところにいる人物だったからである。道成が狭衣の家人であるということが、狭衣への愛を貫くために決定的な障害であったから、女君は道成に従わなかったのであって、これが「さし離れたる賤の男」であれば、あるいは、物語は別の進展を見せたかもしれない。物語の叙述に則して、素直に読むかぎり、女君の入水には階級差の問題は関係がないと、私は思う。

7

飛鳥井女君の物語は、巻一巻末で女君が入水するという形でクライマックスに達し、巻二以後はその後日譚が所々に現れる。それら後日譚のなかでは、飛鳥井女君は実は死んではおらず、兄によって助けられ、帰京して常盤で狭衣の子を生み、出家した後に死んだ、ということなどが、語られるのであるが、それら後日譚に飛鳥井女君自身は直接には登場せず、道成、女君の兄、今姫君の母代、常盤の尼君といった人々と狭衣との対話の中で入水後の飛鳥井女君の動静が明らかになっていくというかたちをとっている。

したがって、狭衣はそれ以後も飛鳥井女君と逢うことはなかったのであり、飛鳥井女君の物語には入水以後、進展がなかったわけである。巻二以下のこれらの叙述を、私が〔後日譚〕と呼ぶのは、そのためであるが、これら後日譚は、単に飛鳥井女君の入水後の動静を語るというだけでなく、むしろ巻三以後新たに始まる一品宮の物語の筋の形成に重要な働きをしている。『狭衣物語』の構成が緊密だといわれる所以であるが、そのあたりの叙述のありようについては、既に前稿[注1]で述べたから、繰り返さない。

ただ、この後日譚に登場する「常盤の尼君」について、前稿で、従来巻一で今姫君登場の際に名前の見える「伯母の尼君」(八二―15)と、巻三以後に現れる「常盤の尼君」とが同一人物とされていたのに対し、そう考えると矛盾が生じることを指摘し、「伯母の尼君」と「常盤の尼君」とは別人とすべきことを述べた。

その考えは今も変わっていないが、その後、堀口悟氏がやはりこの問題をとりあげられ、氏は両者を同一人物である、と結論された[注6]。氏の論は所謂〔構想論〕であって、私とは立つ位置が違っており、したがって結論にも相違が生じるもののようである。しかしながら、氏の論も「『狭衣物語』の構造」というタイトルで、「構造」という語を使っておられるので、氏の論の批判というよりは、むしろ、私の構造論の立場を確認するという意味で、氏の説を少し検討しておきたい。

氏も、私と同様、両者を同一人物と考えると、「尼君」という呼称に不都合が生じ、年立のうえでも矛盾が生じることを指摘しておられる。私はそこで両者を別人と解した。同一人物としなければならない理由はないと考えたからである。しかし、氏は、そうした矛盾が生じるにもかかわらず、両者は同一人物だとする。そして、その理由を氏は次のように説いておられる。

> 母代は今姫君方の人間であるから、伯の君等に関して知っているのは当然であるが、飛鳥井の君の消息まで知っているのはしかるべき理由が無ければならない。この理由を示すのは、巻二以前では、巻一に於て母代が「伯母の尼君」に抜擢された事実以外には

無い。飛鳥井の君を手許に保護した「常盤の尼君」が「伯母の尼君」と同一人物だからこそ、母代が飛鳥井の君の消息を知り得たとしか考えようがない。従って「常盤の尼君」と「伯母の尼君」とは同一人物である。

私は、今姫君の母代が飛鳥井女君の消息を知っているためには「伯母の尼君」と「常盤の尼君」が同一人物でなければならない、とする考え方には承服しかねる。氏も言われるように、母代は「伯母の尼君」によって抜擢されたのであるから、母代と「伯母の尼君」が懇意であることは明らかである。そして、「伯母の尼君」と「常盤の尼君」とが姉妹であることは明らかなのであるから、伯母の尼君を通して、常盤の尼君や飛鳥井女君の情報が母代に入ってくるのはごく自然なことである。伯母の尼君と常盤の尼君が同一人物である必要は全くない。伯母の尼君は巻一ですでに尼となっていたのであり、筑前守北の方は上京後、夫に先立たれて出家し、「常盤の尼君」となった。この間に、常盤の尼君と、既に尼になっていた姉（妹の可能性もなくはないが）である伯母の尼君との間になんら音信がなかったと考えるほうがよほど不自然だと、私は思う。そんな不自然な想定をしてまで、あえて「伯母の尼君」と「常盤の尼君」を同一人物と考え、その結果、物語の筋に矛盾が生じているという結論にもっていくのは、到底私には受け入れがたい考え方である。

外部徴証によらず内部徴証だけから作品の構想の問題を扱おうとする、この種の〈構想論〉は、多くの場合、作品の叙述の矛盾をあげつらい、そこから、作品の成立過程といったことを推測しようとする。しかし、私はまず作品を「読む」ことに重きをおく立場に立つ。作品を読む場合、叙述に（したがって、叙述の解釈に）矛盾を生じないように読むべきことは言うをまたない。したがって、叙述に矛盾が生じるということは、作品が「読めていない」のであり、また、いかに読もうと努めても矛盾が生じてしまうというのであれば、それはその作品が「読むことのできない」作品であるということにほかならない。

私が〈構想論〉に対して否定的なのはそのためである。作品を読もうとする立場からすれば、この種の〈構想論〉は、「読めない」ことの表明でしかないからである。

8

前節に述べたように、巻二以後に配置された飛鳥井女君に関する叙述は後日譚であって、巻一の飛鳥井女君物語とは性格の異なるものである。巻一に配置された飛鳥井女君関係の叙述の構造の輪郭を述べて、本稿のまとめとしたい。

飛鳥井女君の物語は、威儀師事件に始まり、その後、〈女君の不如意〉と〈女君の恋〉の二つの筋が並行して語られる。『狭衣物語』の本筋ともいうべき、狭衣の源氏宮に対する恋は、飛鳥井女君の物語においても狭衣の行動を規定するという形で深く関わっており、狭衣をして飛鳥井女君に素姓を明かさないという態度をとらせる。そして、そのことが乳母や道成に東国下向・筑紫下向の行動をとらせる原因の一つとなっている。この〈女君の不如意〉の筋を支配しているのは、事態に現実的に対処しようとする生活者の論理であるといってよい。

一方、〈女君の恋〉の筋は、東国下向・筑紫下向という障害を経て、

飛鳥井女君の内に狭衣への自発的な愛を目覚めさせる。

以上の二つの対立する筋は、巻末の女君入水によって解決される。女君は乳母や道成を拒絶して、狭衣への愛を貫くために入水するのであるから、このような叙述の構造は、生活者の論理を否定し、愛の至上を語ろうとする意図の現れとみて、ほぼ間違いはないであろう。しかし、〈女君の恋〉の筋の形成に狭衣自身は主体的に関わってはおらず、女君を入水に駆り立てたものも、女君の、いわば自己完結的な愛であった。狭衣が女君との恋に主体的に関わりえなかったのは、源氏宮への執着の所為である。

このように、狭衣が終わってしまった恋への執着のゆえに新たな恋に主体的に関わることができず、物語がもっぱら相手の女の側の意志と行動とによって進展していくという展開のありかたは、『狭衣物語』の構造の特徴といってよく、この物語の性格を考える上で重要であろうと思う。巻二における女二宮の物語についても同様のことが言えるのは、かつて口頭で発表した通りである。(注7)

(注1) 片岡利博「『狭衣』の一品宮――構造論の試み――」(『語文』昭和五二年六月)

(注2) 三谷栄一・関根慶子校注『狭衣物語』(日本古典文学大系79・昭和四〇年八月・岩波書店) 稿中、『狭衣物語』を引用する際は、特にことわらない限り、本書により、引用本文末尾に本書のページ数と行数を括弧に括って付記した。なお稿中では『大系』と略称した。

(注3) 石川徹「古本住吉物語の内容に関する憶説」(『中古文学』昭和四四年三月) 森下純昭「古本住吉物語と狭衣物語――飛鳥井の物語との関係――」(『語文研究』昭和四八年八月)

(注4) 女君の返歌、第一系統本の歌の初二句を、『大系』の頭注は「あなたは『一夜も隔てず』とおっしゃるが、あなたを待って、私はいつまで、涙に濡れた袖を乾かしかねていましょうか」と解している。それも、可能な一つの解釈ではあるが、あるいは、主語を狭衣と解して、「あなたは『袖濡れまさる』とおっしゃいますが、果たしていつまで私のために泣いて下さることでしょうか」と解くこともできるかもしれない。この場合、女君は狭衣に心を開いているとはいえない、との反論が予想されるが、そうではないのであって、女君が狭衣の言葉をこのように正面から受け止めて応じたのはこれが初めてだといってよい。女君が狭衣に対して心を開いたというのは、その謂である。これまでの女君は狭衣との交渉をひたすら「思ひかけぬ有様」であり、「いかにも、あるべき事なら」(七二―12)ず、と思うばかりで、狭衣に恨み言を言うことさえなかったのである。

(注5) 石川徹「狭衣物語の定位」(『国語と国文学』昭和三四年四月)

(注6) 堀口悟「『狭衣物語』の構造――常盤の尼君を軸として――」(『中央大学 国文』(昭和五四年三月)

(注7) 「『狭衣』の女二宮」(昭和五十四年 中古文学会 春季大会・於大阪女子大学)

―松蔭女子学院大学助教授―